

# 内分泌学ウィーク 2014 開催報告

ウィーク統括コーディネーター  
自治医科大学医学部 屋代 隆

2014年10月31日、11月1、2、3日の日程で、東京都千代田区の都道府県会館を会場として、3つの内分泌学系の学会を同じ場所で同じ時期にリレー開催する「内分泌学ウィーク 2014」が行われた。

内分泌学ウィーク 2014は、前回の内分泌学ウィーク 2011に引き続き第2回として企画された。その趣旨は、「内分泌学の研究に従事している研究者、特に若手の研究者のあいだでは、自分が主として活動している学会以外の関連学会にも参加してみたいという希望が多いが、それらは毎年異なった時期に異なった場所で開催されるため、複数の大会に参加することは困難である。内分泌学をキーワードとして関連する諸学会を同じ時期に同じ場所でリレー開催すれば、参加者の利便性を高めることができる。さらに、合同学術集会ではないので、それぞれの学会の独自性を尊重することができる。」である。前回は、第36回日本比較内分泌学会大会（竹井祥郎大会長）、第15回日本内分泌病理学会学術総会（山田正三会長）、第38回日本神経内分泌学会学術集会（加藤幸雄会長）がウィーク開催された。内分泌学ウィーク 2014では、第41回日本神経内分泌学会学術集会（岩崎泰正会長、高知大学）、第18回日本内分泌病理学会学術総会（屋代隆会長、自治医科大学）、第22回日本ステロイドホルモン学会学術集会（諸橋憲一郎会長、九州大学）が、10月31日～11月3日の間で順次開催となった。

大会準備は開催の2年ほど前から始まり、何度か3人の大会会長や関係者が集まって会合を開いた。会場は前回と同じ地下鉄永田町駅に直結する「都道府県会館」（東京都千代田区）とした。自治医科大学が関係する施設であり、立地条件が良いこと等が決定の理由である。当初より、1)一つの学会に登録すれば全ての学会に参加可能とする、2)合同シンポジウムと懇親会は合同で行うが、他のプログラムはすべてそれぞれの学会でおこなう、3)プログラム集・抄録集はそれぞれ作成し総合プログラム集は統一のものを作る、等と合同学術集会ではない各大会の独自性とウィーク開催であるが故のメリットの二つを同時に求めた。また、内分泌学ウィーク 2011の開催を経験していることは強みであった。

ウィーク3日目の夕刻、三学会合同シンポジウム「ホルモン療法・補充療法の理論と実践」が行われた。各三学会からそれぞれ2名のシンポジストが選ばれ活発な討議がなされた。会場はほとんど満席で大変盛況であった。また、神経内分泌と内分泌病理学会の特別講演は相互乗り入れとなり、井村裕夫先生と永井良三先生にご講演をお願いした。こちらにも多くの聴衆が集まった。合同シンポジウムの後に合同懇親会が催された。参加者が少ないのではと当初心配したが、結果的には100名以上の方に参加いただき盛り上がった。3人の大会長と三学会の新理事長の挨拶に引き続き、乾杯となった。懇親会の目玉は岩崎先生も入った3つの学会の会員を中心に編成されたメンバーによる「弦楽四重奏曲」であった。格調高いクラシックの演奏に多くの参加者が酔いしれた。アンコールの声が上がるほどの名演奏であった。

さて、参加登録者数は日本神経内分泌学会が計380名、日本内分泌病理学会が141名、日本ステロイドホルモン学会が95名と例年と比較し増加したが、特に神経内分泌学会の参加者の多さには驚いた。岩崎先生のご努力に敬意を表したい。また、発表演題数・講演数もかなり増加し、合同シンポジウムにも200名ほどの聴衆が集まった。開催地が東京であったことのみならず、やはり内分泌学ウィークとして各学会がリレー開催されたことが参加者の利便につながり、参加者数の増加に貢献したのだと思われる。この総括は内分泌学ウィーク 2011の時とまったく同じである。

（尚、内分泌学ウィーク 2014は日本内分泌学会と日本比較内分泌学会の正式な後援を得た。）